

# 教材としての『源氏物語』

——教科「古典」を中心に——

平 林 優 子

## はじめに

『源氏物語』は、高等学校の教科書において、どのように扱われているのだろうか。まず、ほとんどの生徒が履修する、新課程（平成十一年三月告示の高等学校学習指導要領・平成十五年度入学者より適用）の科目「国語総合<sup>(1)</sup>」では、まとまった単元としては『源氏物語』を取り上げない<sup>(2)</sup>。古典を学ぶ姿勢がしっかりと身についていない時に触れる作品は、難解でない方が好ましく、多くの教科書が、入門の単元に『宇治拾遺物語』を置いている。話の筋が比較的押さえやすい説話文学は、古典の初心者には最適、ということなのだろう。

そして、「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。」を目標に掲げる、科目「古典」になると、ようやく『源氏物語』が登場して来る。さらに、科目「古典講読<sup>(3)</sup>」では、「古典としての古文と漢文を読むことによって、我が国の文化と伝統に対する関心を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。」という一歩進んだ目標のもと、教科書に取り上げられる場面も増え、生徒が物語世界により深く触れられるよう配慮がなされているのである。しかし、教材である以

上、学習指導要領や教科書編集委員の方針に従って、採録する場面は選ばれる。教科書の『源氏物語』は、まとまった場面をいくつか抜粋して並べたものであり、物語全体を通読する場合は、自ずから異なっているはずである。以下、高等学校教科書の『源氏物語』の取り上げ方について、教科「古典」を中心に、考えて行きたい。

一

平成十九（二〇〇七）年度使用の「古典」教科書は、十社十九種類。文部科学省が公開した、平成十九年度の教科書採択状況によると、古文編と漢文編に分かれているものを一冊に換算した場合の出版社別のシェアは、第一学習社（二種類）二七・七％、大修館書店（四種類）一八・〇％、東京書籍（三種類）一七・五％、明治書院（二種類）一一・四％である。<sup>(4)</sup>この四社の合計は七四・六％で、ほぼ四分の三を占めていることになる。そこで、これら四社の「古典」教科書の中から、『源氏物語』を二十数頁取り上げたもの一種類<sup>(5)</sup>づつを選んで主に考察し、他の教科書については、適宜参照する。なお、『源氏物語』の範囲を示すにあたっては、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）の巻数、頁数、行数を用いた。

①第一学習社「高等学校古典 古文編」（以下、教科書①） 計二五頁

●光る君誕生（桐壺）「いづれの御時にか」（桐壺１・一七頁・二行）→「御局は桐壺なり。」（二〇頁・四行）

●若紫（若紫）「日もいと長きに、つれづれなれば」（若紫１・二〇五頁・二行）→「とて立つ音すれば、帰り給ひぬ。」（二〇九頁・九行）

↓教科書④と同じ。

●須磨の秋（須磨） 「須磨には、いとど心づくしの秋風に」（須磨2・一九八頁・一三行）「左右にもぬるる袖かな」（二〇三頁・一〇行）

↓教科書②と同じ。

●住吉参詣（濤標） 「その秋、住吉に詣で給ふ。」（濤標2・三〇二頁・三行）「人知れずしほたれけり。」（三〇三頁・六行）

「国の守参りて」（三〇四頁・一四行）「などみをつくし思ひそめけむ」（三〇七頁・五行）

●明石の姫君の入内（藤裏葉） 「御参りの儀式」（藤裏葉3・四五〇頁・八行）「大きな世のいそぎなり。」（四五四頁・三行）

●紫の上の死（御法） 「致仕の大臣、あはれをも折過ぐし給はぬ御心にて」（御法4・五一四頁・九行）「中宮なども、おぼし忘るる時の間なく、恋ひ聞こえ給ふ。」（五一八頁・一〇行）

②大修館書店「精選古典」（以下、教科書②） 計二〇頁

●桐壺 桐壺の更衣／光源氏の誕生 「いづれの御時にか」（桐壺1・一七頁・二行）「心苦しう思ひきこえさせたまひける。」（一九頁・一五行）

藤壺の入内 「年月にそへて」（桐壺1・四一頁・九行）「なづさひ見たてまつらばや。」とおぼえたまふ。（四三頁・一五行）

●若紫 垣間見 「日もいと長きに、つれづれなれば」（若紫1・二〇五頁・二行）「と思ふ心深うつきぬ。」（二〇九頁・一五行）

↓教科書③と同じ。

●須磨 憂愁の日々／ふるさとへの思い 「須磨には、いとど心づくしの秋風に」(須磨2・一九八頁・一三行)「左右にもぬるる袖かな」(二〇三頁・一〇行)

↓教科書①と同じ。

③東京書籍「精選古典」(以下、教科書③) 計二四頁

●光源氏の誕生 「いづれの御時にか」(桐壺1・一七頁・二行)「この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。」(一九頁・三行)

↓教科書④と同じ。

●若紫 「日もいと長きに、つれづれなれば」(若紫1・二〇五頁・一一行)「と思ふ心深う付きぬ。」(二〇九頁・一五行)

↓教科書②と同じ。

●車争ひ 「大殿には、かやうの御歩きもをさをさし給はぬに」(葵2・二二頁・六行)「見ざらましかばと思さる。」(二四頁・一〇行)

●須磨の秋 「須磨には、いとど心づくしの秋風に」(須磨2・一九八頁・一三行)「鼻を忍びやかにかみわたす。」(一九九頁・一一行)

「前栽の花いろいろ咲き乱れ」(二〇〇頁・一四行)「ひだりみぎにもぬるる袖かな」(二〇三頁・一〇行)

●霞の間の樺桜 「南の殿にも、前栽つくろはせ給ひける折にしも」(野分3・二六四頁・八行)「めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。」(二六七頁・一行)

↓教科書④と同じ。

●萩の上露 「風すごく吹き出でたる夕暮れに」(御法4・五〇四頁・一〇行)「明けはつるほどに消えはて給ひぬ。」(五〇六頁・八行)

↓教科書④と同じ。

④明治書院「精選古典」(以下、教科書④) 計二〇頁

●光源氏誕生 「いづれの御時にか」(桐壺1・一七頁・二行)「この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。」(一九頁・三行)

↓教科書③と同じ。

●小柴垣のもと 「日もいと長きにつれづれなれば」(若紫1・二〇五頁・一一行)「立つ音すれば帰り給ひぬ。」(二〇九頁・九行)

↓教科書①と同じ。

●心づくしの秋風 「須磨には、いとど心づくしの秋風に」(須磨2・一九八頁・一三行)「ふるさとの女恋しき人々の心、みな慰みにけり。」(二〇一頁・一〇行)

●野分の朝 「南の殿にも、前栽つくろはせ給ひける折にしも」(野分3・二六四頁・八行)「珍しくうれしき目を見つるかなとおぼゆ。」(二六七頁・一行)

↓教科書③と同じ。

●三日がほど 「三日がほどは」(若菜上4・六三頁・一一行)「見出だし給ふもいとただにはあらずかし。」(六五頁・一一行)

●紫の上の死 「風すごく吹き出でたる夕暮れに」(御法4・五〇四頁・一〇行)「明け果つるほどに消え果て給ひ

ぬ。」(五〇六頁・八行)

↓教科書③と同じ。

〈先にあげた四種類以外の「古典」教科書〉

⑤「古典1」(大修館書店) 一三頁、⑥「古典2」(大修館書店) 三七頁、⑦「精選古典 古文」(教育出版) 三二頁、  
⑧「高等学校古典(古文編)」(桐原書店) 二九頁、⑨「古典」(右文書院) 二八頁、⑩「古典 古文編」(東京書籍) 二  
八頁、⑪「新古典」(右文書院) 二三頁、⑫「古典」(筑摩書房) 一九頁、⑬「高等学校古典」(旺文社) 一七頁、⑭「高  
等学校古典 古文編」(三省堂) 一五頁、⑮「高等学校標準古典」(第一学習社) 一五頁、⑯「新編古典」(明治書院) 一  
頁、⑰「新編古典」(大修館書店) 一〇頁、⑱「古典 古文編」(教育出版) 九頁、⑲「新編古典」(東京書籍) 九頁。

〈「古典」教科書における採録状況〉

					第 一 部	第 二 部	第 三 部
④	③	②	①	桐壺			
○	○	○	○	夕顔			
○	○	○	○	若紫			
				紅葉賀			
	○			葵			
○	○	○	○	須磨			
			○	濤標			
				薄雲			
○	○			野分			
			○	藤裏葉			
○				若菜上			
○	○		○	御法			
				橋姫			
				浮舟			

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
				○				○		○				
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
			○											
				○					○	○	○	○	○	
					○	○		○	○	○		○	○	
				○			○					○	○	
									○					
						○								
							○		○		○	○	○	
					○	○	○		○	○		○		
													○	
											○			

四つの教科書が取り上げる『源氏物語』の場面は、少しずつ異なるものの、重複する部分も多い。すべての教科書が載せるのは、「光源氏の誕生」（桐壺巻）、「光源氏と紫の上の北山での出会い」（若紫巻）、および「光源氏の須磨での暮らし」（須磨巻）である。また、教科書②を除いた三つの教科書が、「紫の上の死」（御法巻）について触れている。これらは、他の「古典」教科書においても数多く採録されており、定番教材と言うことが出来よう。そして、教材を繋ぎ合わせて行くと、教科書が描き出そうとしている、『源氏物語』の次のようなストーリーが、浮かび上がって来る。

桐壺帝の第二皇子として、身分の低い母桐壺更衣から誕生した光源氏は、紫の上（若紫）と北山で出会い、やがて結婚。一時、須磨への退去を余儀なくされるが、帰京後は栄華を極める。しかし晩年、長年連れ添った最愛の妻紫の上と死別する。

つまり、『源氏物語』正篇を、主人公光源氏の栄華と憂愁に彩られた一生を描く物語と考え、理想の伴侶である紫の上との関係を中心にまとめているのである。

実は、このような『源氏物語』のとらえ方は、これらの場面が高等学校教科書に採録され続け、様々な授業実践の積み重ねの上に形成されたものである。<sup>(6)</sup>『源氏物語』の主題は、決して一つではない。しかし、教科書においては、一つに集約しようとする傾向が見受けられる。世羅博昭による、昭和五十二（一九七七）年度「古典Ⅱ」の『源氏物語』の教科書、十社十二種類の調査<sup>(7)</sup>では、具体的な場面は不明ながら、「桐壺巻」（十一種類）、「若紫巻」（十種類）、「須磨巻」（九種類）、「夕顔巻」（七種類）、「御法巻」（六種類）、「浮舟巻」（六種類）が、上位に顔を揃えている。教科「古典Ⅱ」は、一つの教科書の採録場面が三〜十四箇所と多く、一概に新課程「古典」とは比べられない。だが、この四



つの場面が、約三十年前にはすでに、定番教材として不動の地位を築いていたことだけは確かだろう。もっとも、これらの巻々は、世羅の指摘の通り、そのほとんどが「源氏物語の構想の上で重要な巻<sup>(8)</sup>」でもある。よって、高等学校教科書が取り上げるわけだが、教科書という制約なしに自由に選り出した場合、結果は、微妙にずれて来るものと思われる。

長年、国語教科書の編集委員を務める石原千秋は、国語教科書には、「暴力、セックス、新興宗教、天皇制、差別問題など、いくつかの「問題系」があり、「これらの「問題系」に抵触すると、その教材はまず編集会議を通過できない。」<sup>(9)</sup>と言う。現代文の教材なら、これらの問題系に触れない、新しい教材を探し出したり書き下ろしたりすることも可能だが、古典では、そうは行かない。『源氏物語』は、「暴力」や「新興宗教」は何とかクリア出来ても、「セックス」「天皇制」「差別問題（身分問題）」には、多かれ少なかれ抵触することになる。考え得る可能な対策としては、これらの問題が出来るだけ少ない場面を選び、問題がある場合、指導書や「学習の手引き」等で触れない（隠す）といった方法がとられるようである。<sup>(10)</sup>けれども、古典であることを逆手（？）にとり、このような場面を採択してしまう教科書も、少ないながら存在する。『源氏物語』最大のタブーと言えば、「セックス」と「天皇制」の問題系に真正面から触れる、光源氏と藤壺の密通場面（若紫巻）だが、「古典」と「古典講読」各一冊が、この場面を取り上げる。光源氏の栄華の実現には、二人の密通の結果誕生する冷泉帝の存在が不可欠で、物語の展開上、非常に重要な場面であること、性描写をあらわに描かない醜化表現が用いられていることに助けられたのであろう。

また、四つの教科書すべてが、『源氏物語』の冒頭部分（桐壺巻）を採録するものの、その範囲は微妙に異なる。教科書③と④が一番短く、光源氏誕生の事実と桐壺帝の鍾愛を記す、「この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。」まで。教科書②は、皇子誕生後の帝の更衣に対する扱いの変化と弘徽殿女御（弘徽殿大后）の疑いを記す、「心

苦しい思ひきこえさせたまひける。」まで。さらに長い教科書①は、「御局は桐壺なり。」までを載せている。教科書①が、③と④より長く抜粋した部分は、新編日本古典文学全集の行数にして、十六行。それより前の部分は三十行なので、教科書①は、③と④の約一・五倍の長さを取り上げていることになる。教科書①が伝えようとしているのは、めでたいはずの主人公光源氏の誕生こそが母桐壺更衣を死へ追い詰めて行く、という厳しい現実の存在であり、「学習」において、「光る君の誕生前と誕生後とで、桐壺の更衣に対する、帝や、他の女御・更衣の態度がどのように変わったか、まとめてみよう。」(五二頁)と注意を促している。身分の低い更衣が帝に寵愛される不都合は、すでに光源氏誕生以前でも、充分に示されていた。しかし、天皇の外戚となることが、政治権力の掌握に直結した摂関時代、女御・更衣たちは、その双肩に自家の命運を担い、皇子誕生を切望していたのである。確かに、天皇の寵愛を独占されるだけでも不愉快だろうが、光源氏の誕生は、全く別次元の新たな問題を引き起こす。弘徽殿女御の「坊にも、ようせずは、この皇子のゐ給ふべきなめり」という疑いも、皇子誕生後の桐壺帝の桐壺更衣に対する扱い方の変化を考慮すれば、あながち的はずれではなく、問題は、愛情の範疇を越えて、政治の領域へ完全に入ってしまったと言える。そして、教科書①のみが取り上げる最後の部分では、更衣の御局が清涼殿から一番遠い「桐壺(淑景舎)」であることが示され、改めて身分の低さと苛酷な状況が強調されている。だから、他の教科書では、更衣が置かれた状況に注意を促す問いはほとんどなく、教科書④の「研究」が、「帝が桐壺の更衣を寵愛することに対して、周囲の人々はどのような反応を示しているか、整理してみよう。」というように、「帝の寵愛」による影響に限定して尋ねるのみである。同じ場面を採録しても、どこに重点を置き、何に注目するかによって、扱う範囲が違ふことが窺えよう。

一方、選ぶ場面が四箇所より増えると、新たな人間関係や出来事が、先のストーリーに加わって来る。例えば、教科書③と④が取り上げる、「夕霧が紫の上をかいま見る場面」(野分巻)では、十五歳という高校生に近い年齢の夕霧

が、父光源氏（三十六歳）と義母紫の上（二十八歳）夫婦の様子をのぞき見る。この場面は、教科書⑩（教科書③に一場面が追加されている）を除くと、他の「古典」教科書での採録は皆無である（「古典講読」は三種類）。「主人公光源氏の栄華と憂愁に満ちた一生」というストーリーには、直接取り入れにくいこと、さらには、夕霧の義母紫の上に対する恋情が描かれ、母子密通へと至る可能性が指摘されていることなどが、その原因だろう。だが、このような場面にこそ、その教科書の独自性は現れるはずである。次章では、これまで見て来たような観点から、各教科書の採録場面や発問の特徴を考察するが、その前に、『源氏物語』第三部（続篇）について、簡単に触れておく。

周知のように、『源氏物語』は、主題や表現の面から、三部に分けて捉えることが定説となっている。第一部は、光源氏の誕生（桐壺巻）から准太上天皇となって栄華を極める（藤裏葉巻）までの三十三帖。第二部は、光源氏四十歳（若菜上巻）から、亡き紫の上を想いつつ出家の決意を固める五十二歳（幻巻）までの八帖。第二部に入ると、物語の雰囲気は一変し、光源氏をはじめとする登場人物たちが抱え込む底知れぬ苦悩や六条院が調和を失って崩壊して行く様が描かれる。そして第三部は、光源氏亡き後の子孫たちや他家の動静を語る匂宮三帖（匂宮巻、竹河巻）、および二人の主人公（薫・匂兵部卿宮）と光源氏の弟八の宮の娘たち（大君・中の君・浮舟）との間で繰り広げられる様々な恋愛を語る、宇治十帖（橋姫巻、夢浮橋巻）から成っている。

だが、平成十九年度用「古典」教科書は、桐原書店「高等学校古典（古文編）」（教科書⑧）が、「浮舟が匂兵部卿宮に抱かれて小船に乗り、宇治川を渡る場面」（浮舟巻）を、大修館書店「古典2」（教科書⑥）が、「薫が大君と中の君の姉妹をかいま見る場面」（橋姫巻）を載せるだけである。『源氏物語』を採録する「古典講読」の教科書でも、八社十一種類中四社五種類が、第三部を全く取り上げない。つまり、『源氏物語』の採録箇所は、光源氏を主人公とする第一部と第二部の正篇に、著しく偏っていることになる。

ところが、かつては事情が、大きく異なっただけ。昭和五十二（一九七七）年度用「古典Ⅱ」の教科書では、『源氏物語』を載せる十社十二種類中八種類が、「橋姫」（五種類）、「総角」（一種類）、「宿木」（一種類）、「東屋」（一種類）、「浮舟」（六種類）、「手習」（二種類）、「夢浮橋」（四種類）<sup>①</sup>を、昭和六十二（一九八七）年度用「古典」（古文）の教科書では、十三社三十六種類中二十四種類の教科書が、「橋姫」（八種類）、「総角」（四種類）、「宿木」（一種類）、「東屋」（一種類）、「浮舟」（十九種類）、「手習」（三種類）、「夢浮橋」（十種類）<sup>②</sup>を採録している。近年になってから、高等学校教科書は、第三部をあまり扱わなくなったことが窺える。そこには、新課程における教科内容の削減が影響しているのかもしれないが、第三部の主人公（または女主人公）は誰か、主題は何か、という問題もまた、深く関わっているように思われる。

第三部の主人公は、長い間、薫と考えられて来たが、それが今、揺れている。<sup>③</sup> 試みに、各教科書の『源氏物語』第三部についての説明（教科書②だけは、『源氏物語』全体）を見てみよう。

教科書①——源氏没後の、その子薫ら次の世代を描く

教科書②——第一・二部では光源氏、第三部では薫と匂宮とをそれぞれ主人公とし、彼らと関わる多くの女性を登場させた長編物語である。

教科書③——薫や匂宮と大君・中の君・浮舟など宇治の八の宮の女君たちが登場し、苦悩に満ちた愛が語られている。

教科書④——光源氏の子薫を中心とし、愛執に心悩ませながら仏教に救いを求める人々の姿が描かれる。

定説を重んじる教科書の解説にしては、随分とバラバラな説明が並ぶ。主人公は、薫なのか、匂兵部卿宮なのか、それとも二人共なのか、はたまた宇治の女君たちなのか。主題も、「苦悩に満ちた男女の愛」と「仏教による救済」とが示され、どうもすっきりしない感じである。正篇の揺るぎない主人公光源氏と比較すると、第三部の登場人物たちは、どうしても存在感のなさが目立ってしまう。薫の他に、匂兵部卿宮、大君、中の君、浮舟といった、主要な登場人物たちが複数存在する上に、人間関係が複雑にからみ合い、薫の生涯を辿りさえすればストーリーが理解出来るはずもなく、短い場面を繋げて物語を浮かび上がらせる教科書には、不向きと言えよう。だが、巻数にして『源氏物語』の五十四分の十三、約四分の一を占める第三部を、完全に無視してしまつてよいのかどうか。第三部は、『源氏物語』が最後に辿り着いた世界である。夢浮橋巻末の薫を拒絶する浮舟の姿が象徴するように、女性の生き方が、次第に主題の中心に据えられて行く。<sup>(14)</sup>千年も前に生きた女（紫式部）が、女の生き方について深く考えていたという事実に気づくだけでも、現代を生きる高校生にとって、大変有意義なのではないだろうか。

## 二

続いて、教科「古典」の四つの教科書の特徴を見て行く。先に、各教科書が、教材の羅列によって、『源氏物語』のストーリーを浮かび上がらせることについて述べたが、第一学習社「高等学校古典 古文編」（教科書①）は、それを一番明確に意識して編集されている。この教科書は、全部で六場面。「住吉参詣の折、光源氏一行と明石の君一行が来合はせる場面」<sup>(15)</sup>（濤標巻）と「明石の姫君の春宮への入内と光源氏が出家の願いを抱く場面」<sup>(16)</sup>（藤裏葉巻）の二つが、他の教科書とは大きく相違している。また、紫の上の死を扱ってはいるものの、定番の「紫の上が、光源氏と明石の中宮（明石の姫君）に見守られながら死んで行く場面」ではなく、その後の「致仕の大臣（かつての頭中将）と秋好

中宮の弔問、および光源氏が出家の願いを抱く場面<sup>(17)</sup>を採録しており、六場面のうち三場面までもが、定番教材以外で構成されていることになる。これは、教材と教材の繋がりを大切にし、「光源氏が栄華を獲得する道程」と「光源氏の出家願望」とを、前面に押し出そうとした結果であろう。

しかし、定番教材ではない場面を選ぶには、それなりの覚悟が必要とされる。濡標巻と藤裏葉巻の場面は共に、「光源氏の栄華」を描き出すわけだが、藤裏葉巻の明石の姫君の入内は、明石の入道が住吉の神に願った、一族再興へ向けての第一歩に位置付けられる。つまり、この二つの場面は、「住吉の神」や「明石一族」という点においても、繋がっているのである。さらに、藤裏葉巻の場面では、栄華の絶頂における光源氏の出家願望が、御法巻の場面では、晩年になって最愛の妻紫の上を亡くし憂愁に沈む中での出家願望が対照的に描かれ、光源氏の栄華と憂愁の一生が、「出家願望」という観点から、鮮やかに浮かび上がるよう工夫されている。その関係を图示すると、次のようになる。

濡標巻の場面（栄華）―住吉の神・明石一族―藤裏葉巻の場面（栄華）  
藤裏葉巻の場面（栄華）↑光源氏の出家願望↓御法巻の場面（憂愁）

教科書①は、定番教材や物語のクライマックスを取り上げることより、光源氏の栄華と憂愁の人生を、明石一族など、周囲の人々との関わりから明らかにする点を重視している。定番の「紫の上が死んで行く場面」をあえて採録せず、彼女の扱いが他の教科書より軽いのは、明石の姫君を生んだ明石の君と光源氏の関係に注意を払ったからと思われる。

また、この教科書は、「学習」の発問の仕方にも、特徴が見られる。

A 桐壺の更衣の心情を表した部分を手がかりとして、彼女の置かれている状況を整理してみよう。(桐壺巻)

B 源氏は、周囲の状況をどのように判断した結果、出家の意を強くしたのか、まとめてみよう。(藤裏葉巻)

C 紫の上の死は、源氏をはじめとして、人々の心にどのような悲しみの波紋を広げているか、整理してみよう。(御

法巻)

発問Aは、「桐壺の更衣の心情」を手がかりとして示しながら、周囲の状況や人々との関わりの中で、「彼女の置かれている状況」を理解するよう求めている。一方、発問Bは、Aとは逆のプロセスを辿る。「周囲の状況」から、光源氏の「出家の意」について考えさせ、光源氏一人が勝手に決意するのではなく、「周囲の状況」が影響を与える点に注意を促すのである。そして発問Cは、周囲の人々の「紫の上の死」への対応を問う。致仕の大臣は、たびたび追悼の意をあらわすものの、思い出すのは、同じ季節に亡くなった妹葵の上のことばかり。しかし、光源氏を通してしか紫の上と関わりがなかった者が、彼女の死に深い悲しみを感じるとすれば、身近な者の死を重ね合わせる、このような方法以外にはあり得ない。死者に対し冷淡とも思えるが、登場人物それぞれの立場に立って考えることで、様々な人の思いを理解出来るのではなからうか。けれども、この教科書は、「心情」を問うことには慎重な姿勢をみせている。「源氏の心情とからみあった風物が描かれている部分」(須磨巻)や「源氏一行の華やかな様子を見た明石の君が、わが身を顧みた心情表現」(瀟灑巻)を抜き出させるなど、あくまで表現に沿うよう指示している。

そして、このような教科書①と最も対照的なのが、東京書籍「精選古典」(教科書③)だろう。この教科書の発問は、場面ごとの内容理解に重点を置く。「学習のしるべ」↓「学習の要点」↓「学習のまとめ」のそれぞれが、「導入」↓「理解」↓「発展」に相当し、段階を踏んで理解を深めて行けるよう配慮がなされている。また、「心情」について聞く問いが

目立つのも、特徴と言える。

D 葵の上と六条御息所とが、それぞれ御禊の行列を見物に出かけた動機を読み取ってみよう。(葵巻)

E「何に来つらむと思ふにかひなし。」とあるが、この場面での六条御息所の心情はどのようなであったか。(葵巻)

F 六条御息所の心情の動きを、物語の展開に即してまとめてみよう。(葵巻)

試みに、四つの教科書の中では教科書③だけが採録する、車争いの場面における発問五問のうち、三問をあげてみた。「学習のしるべ」でD(「動機」には、「心情」が影響していよう)を、「学習の要点」でEを、そして「学習のまとめ」でFを問い、すべての段階で六条御息所の「心情」について聞いている。

さらに、この教科書は、「秋」の場面(「須磨の秋」、「霞の間の樺桜」、「萩の上露」)で、それぞれ「秋」の風物(自然)に注意を促す。

G 須磨のわび住まいで秋を迎えた光源氏のそれぞれの場面における感慨を、和歌や漢詩の表現効果に注意しながらまとめてみよう。(「須磨の秋」須磨巻)

H 全体を通読して、野分が吹き荒れているさまを描いている箇所を指摘してみよう。(「霞の間の樺桜」野分巻)

I 全文を通読して、この場面で印象に残った自然の風物を指摘してみよう。(「萩の上露」御法巻)

この三つの場面は、明治書院「精選古典」(教科書④)でも採録されているが、秋の風物に注目するのは、後に引用す



る発問しの一例だけである。『古今和歌集』四季の部の歌数（「春」一三四首、「夏」三四首、「秋」一四五首、「冬」二九首）が象徴するように、平安時代の人々は、四季の中で圧倒的に「春」と「秋」とを好んだ。自然の風物は、和歌や漢詩の表現（引歌や引詩）、登場人物の心情などと密接に結び付いている。もの悲しい秋の風情が、須磨のわび住まいの哀愁や紫の上の死の悲しみを一層かき立て、激しく吹き荒れる野分が、人々の心と六条院の調和とをかき乱す。平安人の自然に対する豊かな感受性に気づいて欲しいという、編集委員の熱い想いが伝わって来よう。

なお、東京書籍は、「古典」教科書を三種類発行しており、「古典 古文編」（教科書⑩）では、教科書③の六場面に加え、「夜深き鶏の声」（教科書④の「三日がほど」と同じ部分、および「あまり久しき宵居も例ならず」（若菜上4・六七頁・一四行）と「難かめる世をと思しくらべらる。」（七〇頁・三行））を採録している。女三の宮が光源氏へ降嫁して三日目、紫の上の女として、妻としての深刻な苦悩が語られる場面である。「夜深き鶏の声」が追加されると、紫の上の存在感が格段に増し、教科書③の採録場面だけでははつきりしなかった、彼女の生涯にも光を当てようとする編集方針が、一層明白になることになる。

ところで、先に少しだけ触れたが、夕霧が紫の上をかいま見る野分巻の場面（「霞の間の樺桜」）は、義母と息子の密通へと発展して行く危険性を孕むため、教科書では、あまり採録されない。だから、教科書③が、この場面を選ぶのには、それなりの理由があるものと思われる。光源氏の生涯を政治的側面からではなく私的な側面、なかでも女性たち（紫の上、葵の上、六条御息所）との関係から映し出そうとしているのであろう。美しい義母の姿を目の当たりにして惑乱する夕霧の姿は、見方を変えれば、紫の上に対する称賛として読みかえることが可能である。「十ばかり」のかわいらしい姿を、かいま見によって源氏に発見された紫の上は、同じくかいま見によって、今度は女ざかりの美しい姿を、夕霧によって見いだされる。そして、夫光源氏と養女明石の中宮とに美しい姿を見守られ惜しまれながら、

死んで行くのである。「若紫」「霞の間の樺桜」「萩の上露」という三つの場面を並べてみると、いずれも、他者の視線にさらされ称賛される、理想的だが受動的な紫の上の姿が立ち現れて来る。そこには、紫の上自身の思いや苦悩は、存在してはいない。彼女の生涯に目を向けさせるには、是非とも「夜深き鶏の声」を加えることが、必要なのではないだろうか。

また、明治書院「精選古典」(教科書④)は、教科書③と同様、光源氏と紫の上の關係に焦点を絞り込む<sup>(18)</sup>。それは、教科書④の採録場面が、多少の長短はあるものの、六場面中、野分巻を含む五場面までが、教科書③と一致することからも窺えよう。この教科書の手引きは、「研究」と「言葉の学習」とに分かれ、「研究」では、登場人物の「心情」を重視する姿勢が顕著である。例えば、「心づくしの秋風」(須磨巻)には、次のような問いが並ぶ。

J「恋ひわびて」の歌に表れている「光源氏」の心情を、その置かれている状況と併せて、考えてみよう。(須磨巻)

K「光源氏」と供の人々との心の交流がよく表れている箇所を指摘して、それぞれの心情についてどのように思うか、話し合ってみよう。(須磨巻)

L自然と登場人物の心情が重ね合わされて描写されている箇所を指摘し、読み味わってみよう。(須磨巻)

まさに「心情」のオンパレードといった感じである。言葉に関する問いが、「言葉の学習」部分にまとめられていることもあり、他の場面の「研究」においても、「心情」を聞くものが続いている。

M「光源氏」が垣間見によって目にしたものを順に抜き出し、その時々「光源氏」の心情をまとめてみよう。(若

紫卷

N「尼君」の「十ばかり」の少女に対する心情を少女の行動に沿ってまとめ、それについて話し合ってみよう。(若紫卷)

O「紫の上」の姿がどのように描かれているかまとめ、その時々「夕霧」の心情の推移を整理してみよう。(野分卷)

P「光源氏」の心情の移り変わりをまとめてみよう。また、それに対応する「紫の上」の心情を抜き出してみよう。(若菜上卷)

Q「目に近く」の歌と「命こそ」の歌の、それぞれに込められた心情はどのようなものか、話し合ってみよう。(若菜上卷)

R「おくと見る」「ややもせば」「秋風に」の三首の歌に込められている、「紫の上」「源氏」「明石の中宮」それぞれの心情を考えてみよう。(御法卷)

一体、「心情」について問う時、最も注意しなければならないことは、何だろうか。おそらくそれは、本文とは関係なく、生徒が自分自身の気持ちを勝手に答えてしまうのを、いかに防ぐかであろう。教科書④では、表現に即して登場人物の心情に辿り着けるよう、適切なヒントを与えるといった工夫がされている。加えて、「考えてみよう」、「話し合ってみよう」、「整理してみよう」など、新学習指導要領に即した主体的な学習を促す表現が多いのも、この教科書の特徴と言える。「学習の手引き」には、その教科書のポリシーが、最も色濃く現れているのである。

そして最後は、大修館書店「精選古典」(教科書②)。採録場面は、桐壺卷(二場面)、若紫卷、須磨卷の計四場面で、他の教科書と比べて少なく、『源氏物語』第一部の前半部分に集中している。須磨卷における光源氏の年齢は、二十六

二十七歳（新編日本古典文学全集の年立による）。光源氏は、五十二歳の幻巻から数年後に死去したと考えられるので、主人公の生涯の約半分しか取り上げていないことになる。しかし、いかに多くの場面を扱おうとも、『源氏物語』全体をとらえるのは、所詮、無理である。第一部の前半部分に限定し、一場面を出来るだけ長く採録することで、『源氏物語』の文章に親しめるよう、配慮しているものと思われる。

「学習の手引き」では、次の問いが目を引いた。

S 先帝の四の宮（藤壺）について、

(1) どのようないきさつで入内したか。（桐壺巻）

(2) 入内してから他の女御・更衣たちにどのように思われていたか。桐壺の更衣の場合と比べて説明してみよう。

（桐壺巻）

(3) 光源氏にはどのように思われていたか。（桐壺巻）

桐壺更衣と「御容貌ありさま、あやしきまでぞおぼえたまへる」藤壺とを並べて取り上げ、様々な点を比較し、光源氏の藤壺に恋情を抱く過程が、理解出来るようになっていく。本来なら、父桐壺帝の後妃にして義母である女性との密通など許されるはずもないのだが、亡き実母と似ているのであれば、母恋いの延長として、情状酌量の余地も出て来よう。

やがて、この藤壺思慕は、北山で発見した幼い若紫（紫の上）への執着を導き出す。だが、「限りなう心を尽くしきこゆる人（＝藤壺）に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり。」とその理由が示されなければ、光源氏が

「十ばかり」の少女にどうして惹かれるのかよく分からない。若紫は、藤壺の姪（兄兵部卿宮の娘）であることが後になって判明するが、この教科書は、光源氏の栄華と憂愁の人生の原点に位置する、「桐壺更衣↓藤壺↓若紫（紫の上）」へと連鎖する想いの存在を、明らかにしていることになろう。

## むすびに

同じ場面を取り上げても、各教科書によって、その扱い方に違いがあることを確認して来た。「古典の教科書なんて、どれも同じ」と考えているとしたら、大間違いである。検定を意識しつつも、各教科書の編集委員が、独自の特徴を出そうと、必死に努力を重ねる様子が窺えよう。当たり前のことだが、教師は、それぞれの教科書の特徴をよく理解した上で、生徒にとって最適と思われるものを選ばねばならない。

近年、本学の日本文学科では、他の分野（現代日本語、日本語史、近現代文学、中国文学）に比べ、古典文学を専攻する学生数が減少する傾向にある。古典を読むには、古典文法や重要古語などの基礎知識がどうしても必要であり、入口のハードルが、少しだけ高いのかもしれない。古典嫌いを生まず、これら必須の知識を楽しみながら身につけてもらうには、どうしたらよいのか。私自身は、遠回りなようでも、助動詞と心情語のニュアンスを丁寧に押さえることによって、現代語が失ってしまった豊かな言葉の世界に触れ、人と人との関係性に敏感な古典語の面白さに気づくよう誘導して行くのが一番だと考えている<sup>(19)</sup>。

読みにおける教師の役割は、読むに値するような文章を選んで与え、好奇心や興味という子ども心のエンジンをかけてやること、（中略）そして、あとは、その子が自分のエンジンの馬力で走っていくのが読むという行為な

の<sup>(20)</sup>です。

小中学生に国語を教える教師の言葉である。小学生が国語を学ぶ時のように、高校生は古典との出会いを果たしている。よって、相手が高校生であっても、このような初心者向けの配慮は必要だろう。幸い、古典作品は、長い年月にわたって人々に読み継がれているため、「読むに値する」文章であることは証明済みである。あとは、少しの生徒の努力と教師の工夫さえあれば、魅力的な世界が、必ずや開けて来るはずである。

#### 注

- (1) 新学習指導要領では、「国語総合」(四単位)か「国語表現Ⅰ」(二単位)のどちらかを、必ず履修するよう定めているが、ほとんどの高等学校は、「国語総合」を必修にしている。ちなみに、平成十九年度使用教科書の採択総数は、「国語総合」一五二万六千五百九十七冊に対して、「国語表現Ⅰ」二八万五千九百三十七冊である。
- (2) 古典・古文の導入部分に簡単に取り上げる教科書は存在する。例えば、三省堂「高等学校国語総合(古典編)」は、見返しと目次の間に「古典の響き」という二ページを設け、「次の文章を繰り返し声に出して読んでみよう。」と注意した上で、『竹取物語』『古今和歌集(仮名序)』『源氏物語』の冒頭を、現代語訳と共に載せている。「国語総合」の『源氏物語』については、安藤徹「教育する『源氏物語』教科書と生涯教育」(『源氏文化の時空』森話社 二〇〇五年四月)が、内容を紹介している。
- (3) 「古典講読」には、例えば三省堂「明解古典講読 日本の説話」や教育出版「徒然草 枕草子 説話」のように、『源氏物語』を全く取り上げない教科書も存在する。
- (4) 「内外教育」五七〇四号(二〇〇六年十二月二十日 時事通信社)。
- (5) 一社が、数種類の教科書を発行する場合、取り上げる『源氏物語』の頁数には、大きな違いが見られる。一例をあげると、大修館書店は、計四冊発行しているが、それぞれの頁数(作品や作者の解説、「学習の手引き」などは含み、各章や各作品

ごとにつく表紙は省く)は、「古典1」と「古典2」(二冊にわたっているため、総頁数も多い)が計五〇頁、「精選古典」が二〇頁、および「新選古典」が一〇頁である。

- (6) 『源氏物語』の研究では、紫の上が正妻格の地位を結婚当初から獲得していたとは考えられていない。秋山虔「紫上の変貌」(『国文学』一九六四年五月)など。

- (7) 世羅博昭「源氏物語」の教材化の実態分析―昭和五十二年度用「古典Ⅱ」教科書の場合―(広島県立安古市高等学校「研究紀要」一九七七年三月)。

- (8) (7)の世羅論文。世羅は、昭和五十二年度「古典Ⅱ」(古文)用教科書に多数採られている重要な巻として、「桐壺」・「若紫」・「須磨」・「若菜上」・「橋姫」・「浮舟」などをあげている。

- (9) 石原千秋『国語教科書思想』(ちくま新書 二〇〇五年十月)。

- (10) 田中貴子『検定絶対不合格教科書 古文』(朝日選書 二〇〇七年三月)。

- (11) (7)の世羅論文。

- (12) 一色恵里「『源氏物語』教材化の実態と考察 その二―「古典」(古文)に採録されている『源氏物語』―」(『語文と教育』一九九〇年八月、『源氏物語』教材化の調査研究) 溪水社 二〇〇一年三月 所収)。

- (13) 第三部(続篇)の主人公については、拙稿「『源氏物語』続篇の「二人の主人公」」(『東京女子大学 日本文学』二〇〇一年三月)参照。

- (14) 「高等学校古典講読 源氏物語 枕草子 大鏡」(三省堂)では、「源氏物語の結末」というコラムで、「光源氏の物語として始まった『源氏物語』は、光源氏の死後の物語である第三部になると、光源氏の子として育てられた薫に焦点があてられるようになる。しかし、物語が終盤に向かううち、浮舟という女性に中心が移っていく。『源氏物語』は男の物語として始まり、女の物語として終わるとも言えるだろう。」(九九頁)と説明されている。

- (15) この場面は、「古典」の他の教科書では取り上げられず、「古典講読」では、「平安文学選―物語 和歌 随想・日記」(右文書院)のみが、全く同じ部分を採録している。

- (16) 「古典」では、「高等学校古典」(旺文社)が、後半の「光源氏が出家の願いを抱く」場面を、「古典講読」では、「高等学校古典講読 源氏物語 枕草子 大鏡」(三省堂)が、当該場面に加え、源氏が准太上天皇になる部分までを採っている。

(17) この場面は、「古典」「古典講読」とも、他の教科書では取り上げられない。

(18) 教科書④の教師用「指導資料」は、「光源氏誕生」と「小柴垣のもと」について、「それぞれ物語の主要人物である光源氏と紫の上の登場を語るところであり、以下の長編構造にとって非常に重要な役割を担っている箇所でもある。」と指摘している。

(19) 心情語のニュアンスを理解するには、まず辞書をひくこと、それから、鈴木日出男『高校生のための古文キーワード一〇〇〇』（ちくま新書 二〇〇六年五月）など、重要語をピックアップしたものを手元に置き、辞書のように使うと効果的である。

(20) 工藤順一『国語のできる子どもを育てる』（講談社現代新書 一九九九年九月）。